

# 若手研究者の会の活動履歴 (1977年～2010年)

間野正美\*・平田竜一\*\*

(\* 農業環境技術研究所)  
(\*\* 北海道大学)

## 1. はじめに

農業気象学会若手研究者の会は、会の発足を1977年とすると、それは現幹事の安武大輔氏の生年であり、飯泉仁之直氏や中野聡史氏にいたっては生まれてもいない年である。そのような長い歴史のある若手研究者の会ではあるが、会の活動履歴を整理した資料は、1993年の農業気象(特別号・日本農業気象学会50年の歩み)に掲載された記事(岡野, 1993)のみであり、他は活動報告が農業気象・生物と気象に散発的に掲載されるにとどまっている。過去の活動履歴は、今後の活動方針を考える際の重要な指針であり、貴重な資料でもあるので、著者が幹事となってから、これまでの講演会のテーマなどをできるだけ詳細に調べた。本部会報告では、それらを調べた結果とともに、活動の変遷の概略も交えて報告したい。

## 2. 若手研究者の会の活動履歴

表1に、記録に残っている若手研究者の会(以下、若手の会)の活動履歴を整理した。1977年～1992年は岡野(1993)の報告と重複している年代であるが、追加した情報もあるため、一括して掲載している。

1977年の若手の会の参加呼びかけから1980年代初めは、会の発足からその基盤を整えていく時期に相当し、岡田益己氏や原菌芳信氏らの幹事連が会の運営に尽力された。原菌芳信氏によれば、当時は“組織として常態化しておらず、学会開催地ごと、イベントごとにとりまとめ役と、何人かが連絡を取り合っただけ”という流動的な状況で、活動の黎明期であったことが分かる。岡野(1993)の報告では、いくつかの逸話とともに会の発足直後の若さの溢れる活動の様子を伺うことができる。

1980年代中盤から後半にかけては、年に2回の会合が定期化され、懇話会とともに専門性の高い研究セミナーが開催されている。研究セミナーで扱っている内容は、コ

ンピュータ(1985年)、バイオテクノロジー(1987年)、リモートセンシング(1989年)など当時の研究の最先端のトピックである。それらのトピックが現在の研究では欠かせない存在となっていることを考えると、若手の会の持つ先見性がかいま見える。当時の手書きの印刷原稿の要旨集は、若手の会で保管しているので、興味のある方は著者らもしくは現役幹事に連絡されたい。

1990年代になると、研究に関するセミナーの他に、海外留学(1991年)、国際会議におけるプレゼンテーション(1996年)、若手研究者へのメッセージ(1999年)など多様なトピックも扱うようになる。この時期は、メーリングリストの試験的運用(1998年)や講演記録のインターネット公開(1999年)などの新しい取り組みにも挑戦している。また、幹事が2年で交代することがルール化してきたのもこの時期である。著者らは、この2年交代制については、1年だと短し、3年以上だと長いので、その間の2年となっている程度にしか考えていなかった。しかし、広田知良氏によれば、2年という期間は、“多くの方が若手の会の活動を経験でき、企画力の養成や人と接する機会を作れるようにする、あるいは2年で交代することで1年目から次の幹事の候補を意識し、若手の学会員全般に目を配れるようにする仕組み”を意図した、深慮遠謀の設定であったことを知り、感銘を受けた次第である。

2000年代は、研究に関したセミナーの開催よりも、若手研究者に課せられた今日的課題、すなわち、成果の論文発表、競争的資金の獲得、キャリアパス確保の模索などを反映した内容のセミナーが多く開催された(英語論文の執筆; 2005年、キャリアパス; 2006年と2007年、公募書類の作成; 2008年)。学会大会の開催形式が変わっていったのもこの時期である。著者らが学会員となってからの学会大会は、夏～秋に他学会と合同で開催する形式が続いたが、2006年の春季大会以降、春に本学会単独で開催する形式に移行していった。この移行は、(懇親会も含めた)若手の会の開催時間が確保しにくくなるという課題ももたらしたが、夕食時に軽食を伴う形式での開催や、オーガナイズドセッションとしての開催など臨機応変に対応し、若手の会の活動はますます活性化している。

2010年代最初の若手の会は、2010年3月に、オーガ

<http://www.soc.nii.ac.jp/agrmet/sk/2011/B-1.pdf>

2011年4月12日掲載

Copyright 2011, The Society of Agricultural Meteorology of Japan

<http://www.agrmet.jp/sk/2011/B-1.pdf>

表1 若手研究者の会年表。表の作成には過去の幹事の方にも協力いただきました。ここにお礼申し上げます。

年度	幹事	開催年月	開催場所	研究会・懇話会・シンポジウム・セミナーのテーマなど
1977	岡田 益己 原 道宏	1977. 6	岩手大学	懇話会 (坪井 八十二 東北農業試験場長を囲んで)
1978	原 菫 芳信 林 真紀夫 岡田 益己	1978. 5	大阪府立大学	懇話会
1979	林 真紀夫 岡田 益己 原 菫 芳信	1979. 4	千葉大学	第1回若者の集い 懇話会
1980	原 菫 芳信 林 真紀夫 岡田 益己 佐瀬 勘紀	1980. 4	名古屋大学	第2回若者の集い 懇話会
1981	仁科 弘重 皆川 秀夫 佐瀬 勘紀	1981. 4	東京大学	第3回若者の集い
1982	朝倉 利員 岡田 益己 佐瀬 勘紀	1982. 5	農業技術研究所	第4回若者の集い
1983	原 菫 芳信 羽生 広道 北宅 善昭 仁科 弘重 谷 宏 岡田 益己 蔵田 憲次	1983. 4	愛媛大学	第5回若者の集い 愛媛大学農学部環境工学研究室の森本氏の案内で施設見学 (参加者34名), 新規活動案の検討, 幹事交代, シンポジウム世話人等選出この頃から, 農業気象若手研究者の会という名称が使われ始める
		1983. 11	東京大学	第1回セミナー「環境要因と作物生育を考える」 1. 電算機による最適制御の問題点-東大における事例から- (蔵田 憲次, 東大) 2. イネの生育・収量と気象 (堀江 武, 農技研) 3. 果菜類の栄養生長と生殖生長の調和 (伊東 正, 千葉大)
1984	羽生 広道 北宅 善昭 仁科 弘重 谷 宏 原 菫 芳信 鈴木 雅一 岡田 益己	1984. 5	福岡ガーデンパレス	第6回若者の集い
		1984. 11	琵琶湖研究所	第2回セミナー「生態学的環境と農生産を考える」 (参加者19名) 1. 環境物理学的方法とその植物-水関係への適応 (高見 晋一, 京大) 2. 第三世界の森林破壊と植物生産 (吉良 竜夫, 琵琶湖研究所)
1985	朝倉 利員 本條 毅 松村 伸二 宮田 明	1985. 5	大阪府立大学	第7回若手研究者の会, 討論会: 農業気象の将来について (参加者約35名) 第2回セミナーの講演要旨 (送料別300円) の販売
		1985. 11	農業環境技術研究所	第3回セミナー「コンピュータの農業への新たな応用を考える」 1. 農業・農学における知識工学的手法の応用 (古在 豊樹, 千葉大) 2. 農業用コンサルテーションシステムの開発 (星 岳彦, 電力中央研究所) 3. 人工知能プログラム言語PROLOGとその応用 (庄野 浩資, 東大) 4. 自然言語処理と汎用コンサルテーションシステム (平藤 雅之, 農研センター) 講演要旨 (500円)
		1986. 5	山形大学	第8回若手の会 懇話会
1986		1987. 1	日本気象協会 (北海道本部)	第4回セミナー「積雪寒冷地の環境問題と農業」 1. 酸性雨 (雪) について (青井 孝夫, 北海道公害防止研究所) 2. 環境行政における環境情報処理システムの役割 (金子 正美, 北海道生活環境部) 3. 積雪寒冷地の雪問題 (浦野 慎一, 北海道大)
1987	松岡 延浩 高市 益行 菅谷 博 星 岳彦	1987. 4	日本大学	第9回若手の会 懇話会
		1987. 12	電力中央研究所	第5回セミナー「バイオテクノロジーにおける工学的アプローチ」 1. 組織培養稲の順化システム (林 真紀夫, 千葉大) 2. キノコ施設栽培における環境調節 (後藤 英司, 東大) 3. ジャーファーマンターを用いた植物の大量増殖技術 (秋田 求, 協和発酵工業) 4. 組織培養器内環境の実態と今後の研究課題 (富士原 和宏, 千葉大)
1988		1988. 4	自治会館 (那覇市)	第10回若手研究者の会

表1 若手研究者の会年表(続き)。

年度	幹事	開催年月	開催場所	研究会・懇話会・シンポジウム・セミナーのテーマなど
1988	松岡 延浩 高市 益行 菅谷 博 星 岳彦	1989. 1	大阪府立大学	第6回セミナー「リモートセンシングの技術の実際とその応用」 1. サーモグラフィ装置の原理と応用(増喜 彰久, 日本電子) 2. 航空機リモートセンシングの実際と農業への応用について—主として航空写真の利用について—(西田 実, アジア航測) 3. 人工衛星データの利用について—ランドサットTMデータと都市気候—(土屋 巖, 香川大)
1989	後藤 英司	1989. 7	筑波大学	第11回若手の会
1990	土屋 和 町村 尚 平野 高司	1990. 8	北海道大学	座談会「農業気象研究における情報管理法」(情報システム研究部会と共催) 第12回若手の会 懇話会
1991	岡野 通明 青野 靖之	1991. 4	南大阪地域地場産業振興センター	第13回若手の会 懇話会「海外における研究交流・留学」
1992	濱崎 孝弘 富士原 和宏	1992. 7	岩手大学	第14回若手の会 懇話会「東北の雪と霧」 講演者：小野寺 弘道(森林総研東北), 十文字 正憲(八戸工業大)
1993	岡野 通明	1993. 4	お茶の水女子大学	日本生物環境調節学会と共催で会合
1994	細野 達夫 寺添 斉	1994. 6	メルパルク熊本	日本生物環境調節学会と共催で会合 日本生物環境調節学会および農業施設学会の若手会員の連絡網を作成中
1995	谷 晃 脇山 恭行	1995. 7	名城大学	合同講演会を開催 シンポジウム「21世紀の農業気象, 生物環境調節そして農業施設—研究フィールドは世界だ!」
1996	広田 知良 荊木 康臣 小林 卓也	1996. 7	宇部全日空ホテル	研究会「国際会議におけるプレゼンテーション」(富士原 和宏, 千葉大) アンケート「国際会議に参加するためのノウハウについて」
1997	小南 靖弘	1997. 6	京都大学	講演会「ノンパラメトリック回帰 その苦悩と栄光」(竹澤 邦夫, 北陸農業試験場) 1996年度の若手の会活動のインターネット公開 「国際会議に参加するためのノウハウについてのアンケート結果」
1998	井上 聡 久保田 智恵利 吉本 真由美 中屋 耕	1998. 7	北海道大学	1998年三学会合同大会若手の会(講演会と北大低温研施設見学)(参加者約60名) 1. 植物細胞の低温順化について(村井 麻里, 東北農試) 2. 雪面付近の積雪構造に及ぼす微気象(八久保 晶弘, 北大低温研) 学会誌報告: 54(4), 372 若手の会主催メーリングリスト試験的運用
1999		1999. 7	愛媛大学	ワークショップ「若手研究者へのメッセージ」(会場参加者52名, インターネット中継視聴者30名) 1. これから論文を書く若者のために(酒井 聡樹, 東北大) 2. ”田舎”で生き延びる方法(粕谷 英一, 九州大) 同ワークショップ講演記録のインターネット公開, 学会誌報告: 55(4), 378
2000	後藤 慎吉 村井 麻理	2000. 8	宮崎公立大学	「ディベート入門」(参加者24名)(講師: 青沼 智 日本ディベート協会理事, 神田外語大学講師)
2001	服部 悦子 小峰 正史	2001. 6	つくば国際会議場	「国際宇宙ステーション計画におけるライフサイエンス研究について」(参加者26名) 講師: 高沖 宗夫(宇宙開発事業団)
2002		2002. 8	東京大学	講演会「若手研究者が陥りやすい間違った統計手法」(参加者54名) 講演者: 山村 光司(農環研), 竹澤 邦夫(中央農研センター) 若手研究者の会メーリングリスト設立
2003	嶋津 光鑑 渋谷 俊夫 佐々木 華織 植山 秀紀	2003. 9	岩手大学	研究会「農業環境工学分野の実用現場と知的所有権」(参加者53名) 1. 現場技術と研究開発の狭間で考えたこと(宮本 久美, 和歌山県農林水産総合技術センター) 2. 農業指導の現場からみたりんご開花予測精度向上の課題(久米 明, 盛岡農業改良普及センター) 3. 特許出願, こうすれば失敗する(中原 正一, 茨城県農業総合センター) 4. 研究者のためのパテント頭脳(丸岡 裕作, 丸岡特許事務所弁理士, 岩手大学地域共同研究センター客員教授)
2004	高木 健太郎 杉浦 裕義 岡田 周平	2004. 9	福岡国際会議場	研究会「研究者のグローバリゼーション」(参加者29名) 1. Becoming an established researcher in overseas: Canadian example (林 正貴, University of Calgary) 2. 原点と転換のなかの国際開発研究の道のり—自然科学と社会経済学の融合をアジアとアフリカで目差して—(John S. Caldwell, 国際農林水産業研究センター)

表1 若手研究者の会年表(続き)。

年度	幹事	開催年月	開催場所	研究会・懇話会・シンポジウム・セミナーのテーマなど
2005	高木 健太郎 杉浦 裕義 岡田 周平	2005. 9	金沢大学	研究会「How to write and publish an English scientific paper successfully」(参加者60名) 講演者: Richard S. Weisburd (筑波大学生命環境科学研究科 助教授, 江川ランゲージ&サイエンティフィック サービス Editor-in-Chief)
2006	高山 成 下田 星児 山田 雅仁	2006. 9	北海道大学	研究会「若手研究者は今後のキャリアに農業気象研究をどう生かすか? ~エネルギー・環境ビジネスを例に先輩のキャリアに学ぶ~」(参加者29名) 講演者: 佐藤 隆光 (気象協会北海道本部気象情報部), 猫本 健司 (OR畜産技術研究所, 酪農学園大学客員助教授)
2007		2007. 9	東京農工大学	講演会「若手研究者は今後のキャリアに農業気象研究をどう生かすか? 次世代のリーダーへ 研究者, 一個人としての道のり」(参加者約30名) 講演者: 岡田 益己 (東北農業研究センター), 渡辺 力 (北海道大)
2008	間野 正美 松浦 庄司	2008. 3	海峡メッセ下関	講演会「競争的資金獲得のための申請書作成のヒント」(講師: 競争的資金の配分機関より来演)
2009	中路 達郎 加藤 知道	2009. 9	東京大学	講演会「プレゼンテーション力を高める — 一目置かれる発表のために」講師: 梅本 和正 (春日部厚生病院, 言語聴覚士)
2010	平田 竜一 飯泉 仁之直 安武 大輔 中野 聡史	2010. 3	名城大学	オーガナイズドセッション: 若手研究者から見た農業気象学 (参加者41名) 1. これからの農業気象研究者 (広田 知良, 農研機構北海道) 2. 植物のVOC交換研究にいたるまで (谷 晃, 静岡県立大) 3. 農業気象から近隣分野研究への参画と死角 (下田 星児, 近中四農研センター) 4. データ同化時代の農業気象学 (飯泉 仁之直, 農環研)

ナイズドセッション「若手研究者から見た農業気象学」として開催され、学生を含めた若手から諸先輩方まで多数の参加があった。セッションでは、新進気鋭の中堅・若手の研究者に、これまでの研究を振り返りつつ、農業気象学という学問における自身の研究の位置付けを提示していただいた。これにより、農業気象学の近年の対象範囲が整理され、若手研究者が今後の自分の研究や農業気象学のこれからの方向性を考える一助となった。2010年には、若手の会のホームページも開設され、若手研究者間の活発な交流と切磋琢磨を図り、魅力のある2010年代の若手の会活動を目指して幹事連は尽力中である。

研究人生を送るにあたり、いつかは職務や学会等社会活動上の役務を経験せねばならず、若手の会はその訓練に最適な場である。若手の会の幹事を務めることで、役務経験だけでなく、多くの仲間との連帯が生まれている。この部会報告が目にとまった若手研究者の方々、もし幹事の依頼があった場合は率先して引き受けて、その最初の一步を踏み出して欲しい。荷が重いと思うこともあるかもしれないが、過去や同期の幹事連と議論を交わすことで負担は解消され、充実した達成感と貴重な経験が残るはずである。次期の幹事は、松田 怜氏 (東京大学)、

遠藤良輔氏 (大阪府立大学)、根本学氏 (北海道農業研究センター)、吉田ひろえ氏 (中央農業研究センター) が務める。諸先輩方には、今後とも、若手研究者・若手の会の活動を注視しつつ、温かい励ましと叱咤激励をお願いし、報告を終わりとしたい。

### 3. お知らせ

若手の会のホームページのアドレスは、<http://www.soc.nii.ac.jp/agrmet/wakate/index.html> です。

若手の会のメーリングリスト (AMYOUNG) に参加を希望される方は、若手の会ホームページの入会案内を参照し、メーリングリスト管理者までメールをお送り下さい。

なお、若手の会の入会資格に年齢制限はなく、「自称若手」であればどなたでも入会可能です。学生会員の方も含め、皆様、気軽に参加下さい。若手の会は、多数の皆様の入会をお待ちしています。

### 引用文献

岡野 通明, 1993: 若手研究者の会. 農業気象, 49 (特別号), 123 - 124. (本記事は、上記の若手の会ホームページから参照できます。)